三心と五念門との關係論

三長覺靜

一

三心と五念とは禮讃前序の說相により、古來一往は安心と起行とに配せられる、がもと心行は不可分のものであるから、導師も三心の行相として五念門を採用されて居る。然し三心は大經殊に觀經に出でゝ導師之を釋顯し、五念は往生論に出でゝ論註に釋せられ、彼此其出所釋家異るが故に兩者を契合一致せしめんとせば、其處に何等かの難點が出來る。とはいへ其基く所均しく正所依の經論であり、又既に導師に於て兩者を釋合せられんとするの御意炳然たる以上、末徒として兩者の關係を曖昧にして置くべきでなく、否な之を明かにすることは彌々自己の心行を整備する所以である。此を以て善導門流諸家の先賢此れが鮮明に努め、以て末徒に指示せらるゝ所決して尠しとはしない。然るに先年野々村直太郎先生は「淨土敎批判」を著して、淨土立敎開宗の眞精神を發揮すべしと提唱し、更に又「淺きは深きなり」と題する一書をものして其本意を鮮明せられ、其後者に於て「善導に復れ」の一節を設け、千年未決の問題、好端緒、先人の用意、三心と五念、秘鍵は手に在り、排列の異解、配當の異解、三心の體系、煩瑣宗學の無能、一經の大觀等の十目及び結語より成る詳論細說を以て、三心と五念とに對する導師の異

常なる態度に着目留意し、其處に二種深信の大事の存するを説明すると共に、淨土教の先哲古賢は之を徒らに雲烟過眼視し、特に鎮西、記主、岡師等は高祖の意を看却せりと難じて以て鎮西一流の徒に其辨疏を求められた。こと既に古り、然るべき解答亦た出でゝ決せられたであらうが寡聞にして未だ之を知らず、且つ自分にとつては常に新しい問題として年來意識されるものであるから、以下且く我先哲學匠の指教を窺ひ、此問題に關する所見を記すことゝする。

二

イ、五念門は心行の何れに屬する哉といふに、往生禮讃前序に「今人を勸めて往生せしめんと欲せば未だ知らず、いかんか安心し起行し作業して彼の國に生ずることを得るやと問ひ、それに答へて、必ず彼の國土に生ぜんと欲せば、觀經に說くが如きは、三心を具すれば必ず往生を得」等と云て三心を示し直ぐ續いて「又天親の淨土論に云ふが如きは、若し彼の國に生れんと願ずること有る者には、勸めて五念門を修せしむ乃至五門既に具すれば定んで往生を得、一一の門、上の三心と合して隨て業行を起せば多少を論せず、皆な眞實の業と名くる也應に知るべし」と述べ、次に又直ちに「又た勸めて四修の法を行ぜしめて、用て三心五念の行を策して往生を得せしむ云々」とある文勢より見れば、五念門は正に三心四修卽ち安心と作業とに對する起行なりと見得られる。仍て我一流では概して五念門を起行として取扱れるが、然らば五念門の作願回向の二門と第三回向發願心と何の差別ありやといふに、記主は禮讃私記上（淨全四、三八二）に、作願回向の二門は是れ行にして正因、第三心は此上に具せられるもので斯心は廣く萬行

萬善に通ずるも行は狹しと判ぜられて居る。とはいへ強ちに執することなく、東宗要四（淨全十一、九八）に五種正行と五念門との或同或異なることを辯ぜらるゝ中「五種正行には必ず安心を具すれば、卽ち作願と回向とを攝す」と云て此れが心門にも通ずることを認め、聖岡國師は禮讃私記見聞上（淨全四、四三七）に具に有人の三說及び白籏相承の說を擧げて料簡し、而して「師の仰せは論は本より多含なるが故に作願回向の二門に於て、各心行の兩邊を含む、或は安心に約し、或は起行と爲す、各一義に據り並に相違せず」と結び、尙更に其心行に通ずる由を委釋せられて居る。

ロ、五念門の排列に就て論文と禮讃の文とを對照するに、論には一者禮拜門、二者讃歎門、三者作願門、四者觀察門、五者廻向門と標擧し、次第して釋せらるゝにも拘らず、導師は之を引證するに方り一者身業禮拜門、二者口業讃歎門、三者意業憶念觀察門、四者作願門、五者廻向門と標し、彼の第三と第四とを相前後せしめられて居る。此に於て老先生は善導が權威ある淨土論に示されたる排列の順序を故らに亂せるは、必ずやそこに然かせらるゝことを必要と認むべき相當の理由が存せねばならぬ。當に是れ善導敎義の中心點に於ける未解決の疑案、卽ち二種深信の矛盾相を決すべき好端緖で看過すべからざる所だとし、然も此れに對する淨土敎先人の用意の周到ならざるを慨かれるのである。

記主は此第三第四の倒置につき、禮讃私記上（淨全四、三八二上）に之を問答して「問、論には作願を第三と爲す今何ぞ第四に置くや。答、作願回向相似す、故に別の由無し」といひ、岡師は之を承けて同見聞上（淨全四、四三八下）に「今之を案ずるに、讃文の意は身業禮拜口業讃歎次に意業觀察を標す。作願廻向に至ては其門中に於て別の行儀無し、上の三業の行に付て或は作願を運び、或は廻向を致す。故に並べて二門を標し以

て一雙とす。論文の意は五種業を料簡す、身業口業意業智業方便業の次第順ずるが故に、第三には作願を標し、第四には觀察を標する也。所文各其所以あり、卽ち行人の用意一准ならざるが故耳と相似の義を布衍說明されて居る（決答疑問銘心鈔下淨全十、七九上參照）

八、三心五念の配當。導師は觀經の中軸をなす三心を廣釋するに五念門を其行相として用ひ、而して第一至誠心に配するに禮拜讚歎作觀察の三を以てし、第三回向發願心を釋するに作願と回向との二を以てし、第二深心には五念の何ものも論文のまゝには配されて居ない。此は讚文疏文共に見らるゝ所であるが、今之を以て五念門排列の次第を推考すれば、此は是れ導師が三心の意義乆は面目を五念門によりて發揮せんとせらるゝ精神に出づるもので、導師としては論文の舊排列を是非とも變更せざるを得なかつたものゝ如く、先生は此に大に着目して立論せられ、其論旨は透徹して居る。

然るに鎭流の祖師は先生も指摘して、善導の文面配當を蹂躪無視せる不當のものだと迄言つて居られる通り、直接此配當に就て釋することなく、經論釋合の一段に關し、鎭西は西宗要一（淨全十、一三八下）に「然れば則ち善導の三心を以て論の五念門を意得合す時は、前三念門は是れ至誠心の意なり、第四の觀察門は是れ深心也、此觀察門を正き觀門と思食て廣く筆を盡し給ふ也、末後の廻向は觀察門を廻向するが故に只一行也、是れ經の廻向發願心也、是故に論の五念と經の三心と是の如く意得られたり」と論じ、記主は同聽書本（淨全十、二五二上）に師意を顯さんとして第四門は五念の中の正業也深心は其行を往生の業と信ずる也。故に長行に起觀生信の一段なり、五念門は正因なりと雖ども信を立てゝ觀察を以て深心に當る也。是れ意業なりと雖ども別意有るが故に第一心に當てすして第二心に當る也。廻向門は是れ起行の廻向なりと

雖ども廻因向果之義、第三心に同じきが故に一往之に當る也」と釋明されて居る。（無量記下參照）

三

以上二のイは鎮流末徒でありながら先德の明示を無視せるかの風あるまゝに記述した迄のことであるが、ロハは摘つて以て難せられんとする所であり、御尤も至極の說の如うにも首肯される所であるから以下特に此に就て辨別する。

第一、此問題に就て云々せんとするには、高祖が禮讃に「一々門與二上ノ三心一合スレバ隨レ起二業行一不レ問二多少一」と明示せらるゝ如く、三心は横に五門一々に合して、偏に三五對配し去らるべきものでないこと從て讃文の上に於て見らるゝ兩者の相配のみに着目して、祖意を推斷し、偶々此れと合せざるの故を以て祖意を無視せるものなりと批議するは偏見である。

第二、若し夫れ三心が五門に横具することは自明の理なれば敢て論及しない迄のこと、今は唯だ竪に五門の何ものも深心に配せられて居ないことを明記されて居ないのは不都合千萬だと難ずるのであるとならば、そは根本的に鎮流祖師先德の述作の隨所に窺はるゝ總意を觀ない局見であり、少くも當流からいへば、此れ卽ち高祖の本意を未だ解せざるものであり、高祖が稱名行を深心の行體として確說せらるゝをさへ、故意か錯誤か看過するものだといふことになる。

高祖一代の述作就中往生禮讃、觀經疏の趣意が結歸一行三昧にあることは文義炳然であり、元祖は「源空が目には三心も五念も四修も皆俱に南無阿彌陀佛と見ゆる也」と明示されて居る。仍で鎮西は授手印

等に之を承けて三心五念一々南無阿彌陀佛と的說し、記主は東宗要回（淨全十一、九七下）に「五念とは一行三昧所具の五念也、三心五念四修一行三昧と釋し列ぬるは卽ち此意也乃至是れ卽ち釋の本意を探て稱名の一機に橫に五念を具する相を料簡す」と相傳の實義を述べられて居る。則ち假令相對的には鎭流の祖師が行爲本說をなすにもせよ、信機信法の深心の本旨に徹底せらるゝは何人も認知さる可く、況して心行二派を公平視せらるゝ論者、虛心平氣に此等の文意を領せらるゝならば、鎭流の先哲に加へらるゝ批議は自ら是正されるであらう。

第三、既に高祖自ら三心と五念とは截然配當すべきものに非ずとなし、鎭流の先哲が相關說も無分別觀に基調せることを會得すれば、我等末徒は勿論既述の隨宜假設の一義のみを固執すべきではなく老先生の說も亦其提唱の義趣に於ては、鎭流先哲の敎說より當然派生さる可きものとして容認すべく、否な古來入信の必然過程として强調せらるゝ所であつて珍奇の說ではない。但だ恐るゝ所は單信口稱の實行に迄高調せられない信機信法が分別概念に止まり易いことであり、而して兎角此に陷らんことを省慮して專稱南無の行業を第一とする次第である。

第四、若し夫れ更に具體的に又直接鎭流先哲の三心五念關係論に就ていはうならば、如來の智海、論主の深意、高祖の內證都て異路なく一味平等にして、論主は觀察を本とするも、然も讃歎の中に稱念有つて稱名を存し、高祖亦た稱名を正とするも、然も觀察を存するが故に、觀經の宗旨中に觀佛三昧宗あり、而も此相違は機根觀の不同によるも、基く所は觀經にある。仍で論主は觀經答請の意により、且つ論主及び當時の機根は定善を修するに堪ゆる故、觀察爲正の五念門を立てゝ自ら作願觀察と次第し、高

祖は觀經自說の意により、稱名爲正の五正行を立てられ、從て正しくは稱名を正定業として信を立てゝ卽ち深心と稱名行とは歸一するものとせらる。然るに稱名行は五念門の何れにも適中しないから、高祖の現文には深心に五門の何ものも配されないのである。が此三心五正行兩者の主體を必然一致結合せしめらるゝ高祖の意趣を汲で觀察爲正の論の現文に對望すれば、五念門中の觀察は深心に配せらる可く、又此高祖の心行必附、稱名爲本觀を以てする五念門觀が論文の當意と相違し、此に自ら作願回向相似し來り、而して深心の行體が稱名たる以上、作願と觀察とを倒置し、其前三後二を第一第三心に配して以て經の三心と論の五門とを釋合せらるべきは必然である。此のことたる論者の尙ほ引用する上揭の文に明かなる所、然も特に「別意有る故に」と立義の根據を提示し、又「別由なし」で高祖は故らに論意を變更して第三第四の兩門を倒置せられたのではなく、唯だ論主の本意を時機に契當せしめて發揮せしむるが爲めの自然的變改によつて讃疏の現文の如く三心と五念とを相配せられたのだと觀らるゝ鎭流先德の意の存する所を領解すべきである。

尤も此觀察は論者のそれとは本末顚倒し、鎭流の先德は近くは天親善導の兩祖內鑑冷然同一味であり往生極樂の法門が至極甚深にして機の上下を簡ばざる萬機普盡の法門であるといふ所に深厚なる信仰を立て、而して當機衆に適應する高祖の敎說によつて彌々之を堅實ならしめらるゝものであり、從て兩祖立說の不同は唯だ機に逗する義の左右に過ぎずとせらるゝのであるが、論者の如きは立說の不同に着目し、此は是れ內面的意義の相違より來るものと觀、其別義に依て今特に高祖の眞面目を發揚せんと期せらるゝものである。此兩者の何れが是なりやは畢竟任意にして互に他を難ずべきではなからう。少くと

も我先哲は敢て此兩者の一方に偏せらるゝ者でないことは既述する所で明らかであり、然も眞要とせらるゝ所は、此相對的岐路に立ち、或は分別の見に執はれて高祖の深意眞實の正道を失はざらんことにある。

四

最後に上來述ぶる所、或は短見の致す所自ら先哲の正意に背かんことを恐慮し、左に當問題に關する傳文を掲げて補正に供へる。

二祖鎭西上人の「授手印」に曰く、

善導ノ御意ロ、入淨土宗修シ正助二行ニ具足シ三心ニ之人、必耳レ修シ五念門ニ敎レ之。禮讃ニ云、如ニ觀經ニ具ニ說ニ應レ知、又如キハ天親ノ淨土論ニ云ニ若有レ願レ生ニ彼國ニ者、勸テ修セヨ五念門ニ、五門若シ具シヌレバ定メテ得ニ往生ニスルコトヲ、

釋ノ心依レ經已明シ三心ニ畢ヌ今又依テ論ニ明ニ出シヨ五念門ニ經ノ三心ト論ノ五念門トヲ釋シ合シテ、經論如シト此釋シ合スル之心也。

酉譽聖聰上人の「五重拾遺抄」上卷に「授手印」の文意を傳へて云く、

釋意依レ經已ニ明ニ三心ニ畢ヌ乃至經論如レ此釋合之意也等者、此ハ是レ深キ所傳也。謂ク、經ノ三心與ニ論ノ五念ニ約レ横約レ竪、以ニ三心五念ニ一物ナルヲ之義在レ之。今隱レ言顯レ意。三心五念引合スニ也。而傳心ハ猶秘ニ此深義ニ假ニ設ケテ一義ニ通ニスト伏難ニ云ヘリ。是レ亦ダ一ノ會釋トシテ符合ニセリ本文ニ。雖レ然三心五念一體ノ義ハ古キ相傳也。須レ待ニ聞於重書ニ云々。